



# さいみん レクサス!

Hypnosis Lesson!  
アイドルアロキユースは催眠で

立ち読み版

小説◎栗栖ティナ  
挿絵◎あいのせりん

くりやま かれん

## 栗山花恋

アイドルグループ「恋色ディーバ」でカレンの芸名で活躍する少女。本来はちょっと引っ込み思案な女の子で、文也の協力を得てアイドルになった。



## 登場人物紹介

Characters



もうひとつだけ……おねだりしてもいい？

UNIT THE KOIRO DIVA

## わくい ふみや 涌井文也

『恋色ディーバ』のマネージャー兼プロデューサー。花恋と瑠香の幼馴染みでもある。

ながえるか  
**永江瑠香**

芸名ルカとして活躍する「恋色ディーバ」のムードメイカー的存在のアイドル。花恋に誘われてアイドルになったのだが、恥じらいの少なさで困ることも。

わっくくん、大胆なことするねっ



**ミレーユ・ブレトン**

『恋色ディーバ』のお姉さん役のアイドル。フランス人とのハーフで、芸名はミー。ちょっと潔癖症なのが玉に瑕で、エッチなことを許せない。

信じていますわ、プロデューサー



プロローグ	レッスンスタート!	007
一章	催眠レコーディング!	065
二章	催眠インタビュー!	108
三章	催眠フォトグラフ!	153
四章	催眠シークレットライブ!	201
エピローグ	レッスンは終わらない	251



必死に自制しようとしている青年の努力に気付くこともなく、ツーサイドアップの少女はその火照る頬を胸板に擦りつけ、全身で甘えてきていた。

「うっ、あ、あの、花恋！ 身体が……うっ、ああ……」

自然とお腹の辺りには彼女の形よい美巨乳が押しつけられる形になる。

(やっぱり大きくて……気持ちいい感触だよな、花恋のおっぱい)

胸元を飾るリボンがずれてしまいそうなくらい、ギュッと強くお腹辺りに押しつけられている双乳。先日、屹立を挟んでもらったその魅惑のふくらみは、今日も程よい弾力で肌を押してくれている。

互いの服越しだというのに、しつとりとシルクみたいに滑らかな肌触りまでが伝わってくるよう。その幸せな温もりに促されて、鼓動が激しく高鳴ってきた。

また、この胸を——いや、愛しい幼馴染みの魅力的な肢体を、隅々まで感じたい。そして彼女が望むとおり、自分だけのものにしたという想いが胸いっぱいにくらむ。

(花恋も不安がつてるし……うん、そうだ。それくらいしてあげないと……)

自分自身を言い聞かせるように心の中で呟きつつ、文也は半ば無意識のうちに両手で催眠術を発動させる『鍵』となるポーズを作り始めた。

「花恋、言葉だけじゃまだ俺の気持ち全部伝わらないかもしれないしさ。もつと恋人らしいこと……しないか？」

「えっ、文もお兄ちゃん、それって……あうっ、あの……嬉しいけど……」

「問いかける青年を見上げたツーサイドアップのアイドルは、頬を赤らめて言葉尻を濁してしまふ。誘いの意味は理解できているらしいと反応で察した文也は、小さく息を吸ってから両手の指で作った犬の鼻先をキスさせるように接触させた。

「今から花恋は、恥ずかしがらず素直に俺におねだりできるようになる。思いきりエッチに……積極的に。俺と本当の『恋人』になるために、いっぱい誘惑するんだ」

興奮に上擦る声で催眠術をかけた直後、一瞬だけ消えた瞳の光が戻った幼馴染みが、真っ赤に染まった頬を震わせながら語りかけてきた。

「あ、あの。私も……したい。ちゃんと文もお兄ちゃんと恋人になれたっていう証が欲しいから。だから、その……えっと……あうっ……」

言いづらそうに途切れ途切れ呟く花恋は、そこで一度息を吞むと羞恥を堪えるように硬く目を瞑って叫んだ。

「わ、私のこと……お兄ちゃんの『女』にして欲しいの！」

大胆な台詞と共に身体を離れた花恋が、緊張に声を震わせながら後ろを向く。

ちようど目の前にある収録用のマイクに向かって軽く身体を前に倒してお尻を突き出すと、そのまま両手で桃色のスカートをもつと捲り上げた。

「文もお兄ちゃんとひとつになれたら、私、お兄ちゃんのものにしてもらえたって実感で

きる。そうしたら、ちゃんと歌えるようになるから……」

「ああ、いいよ……花恋。凄くエッチで興奮する誘惑だ」

深く熱い吐息を零しながら、文也はあらわになつた彼女の下腹部に見入つてしまふ。

雪色のオーバーニーソックス、そこよりもさらに白く眩しく滑らかに輝いているふとももは見るからに滑らかそうで、今すぐにでもその手触りを確かめたいほど魅力的だ。

「花恋、もっと誘惑してくれ。俺が我慢できなくなるくらい……」

今にも倒れそうな激しい目眩を堪えつつ、肩越しにこちらを振り返る少女へ指示する。

「……うん、見て。文也お兄ちゃんにだけ、見て欲しい」

羞恥に声を震わせながら、ツーサイドアップの少女はさらにお尻を突き出してきた。

決して大きくはないが程よく肉がついて丸みを帯びている尻房は、スカートよりも淡い桜色の可愛らしいショーツに包まれていた。

サイズが小さめのせいか、尻肌食い込んだ端が少しずつ中央へ寄ってきてしまう。股布はそこに浮かぶ縦筋へ埋まり、段々と色味が濃くなってきた。滲み出ている液体で生地が濡れてその部分との密着が強くなり、桃色の肉唇が透けて見えてきているのだ。

（い、いいのかな……本当に続けさせて。これはさすがに……）

いくら想いを伝えあつたとはいえ、恥ずかしがりやの少女に催眠術でこんな痴態を強いるのはやはりやりすぎだと思う。だが、ヒクヒクと小さく震えている割れ目を凝視してい



ると、ここで止めようという気持ちはすぐさま吹き飛んでしまった。

「うっすら見えちゃってるよ、花恋の恥ずかしいところ……凄く綺麗だ」

「視線を感じちゃう。文也お兄ちゃんに一番恥ずかしいところ……オ、オマ○コ見られちゃってるなんて、ステージに立つときよりも胸がドキドキして、頭がおかしくなっちゃいそうだよ……はぁ……んう」

はにかみながら呟く声に合わせ、花恋はまるで踊るように腰を回し始めた。

突き出されたヒップが青年の視線を煽るように動き、股布もニチュリと卑猥な水音を鳴らしながら奥の方へ食い込んでいく。

そこに浮かび上がる形も、自然と鮮明になってきた。熱い吐息を零す紅色の唇をそのまま写し取ったような、あまり大きくないサイズ。

ぷっくりと盛り上がった周囲の部分は休みなく痙攣を繰り返し、濡れて染みが広がった布地がどんだん中央の谷間へ寄せられていった。

断続的に締まる縦筋が股布を噛むと、その度にじわりと透明の甘液が溢れる。

あまり広いとはいえないブース全体に広がる独特の匂いは、嗅いでいるだけで意識が遠のいてしまいそうなくらい扇情的だ。

「はぁ、んっ、ダメ……もうショーツ濡れすぎて、べちゃべちゃしてる。き、気持ち悪いから……ずらすね。直接、見て欲しいし……」

尻振りダンスを止めたツーサイドアップのアイドルが、その紺色の瞳を細めて小声で囁きかけてきた。自ら口にした大胆な台詞で緊張したのか、肉貝がギョツと硬く股布を噛み締める。溢れてきた大量の愛液はふとももを伝ってオーバーニーソックスまで垂れ、その端の部分にじわじわと染みが広がってきた。

「恥ずかしいよ、私。見られてるだけなのにエッチな気分……止められない。ここ……お兄ちゃんとひとつになれる場所が疼いて、切なくて、もうおかしくなりそう」

淫らな告白と共に花恋は自らのショーツへ手を伸ばし、股布の端を捲っていく。

——ニチュツ。

「ひゃうっ、はぁ……んんっ！ み、見られちゃう、文もお兄ちゃんに……あぁっ」

濡れ蠢く肉唇を弾く音がブース内に響き、それと同時に歓喜と羞恥の入り混じった花恋の甘い声が飛び出した。

生まれたての子鹿みたいに膝を震わせ、咄嗟に正面の譜面台を両手で掴んで必死に身体を支えながら、絡みつく媚肉を振り払うように股布を完全に横へずり寄せる。

「んふっ、ど、どうかな。私の恥ずかしいところ、丸見えになってる……？」

「あぁ……凄く綺麗だ」

問われるまま、思わず素直に感想を漏らしてしまう。

元々濃くない体質なのか、うっすらとわずかな恥毛が生えているだけ。おかげで休みな

く蠢く小陰唇の動きも、まるで餌を求める鯉の口みたいに開閉を繰り返す腔口も丸見えだ。「どうかかな? 私のここ……もう大人だよ。ちゃんと文也お兄ちゃんと繋がれる……」

「多分、そう……だと思う。お、俺も見るの初めてだから」

意識朦朧としているせいで言わなくてもいい情けない告白をしつつ、目線は濡れ蠢く割れ目から外せないまま。

余計な肉ビラがはみ出すこともなく、色は上品な桜色。明るく愛らしい少女に相応しい蜜園は、想像をはるかに上回る美しさと女の魅力を漂わせている。

(ここに、俺のチンポを入れる? どうなるんだ、そんなことしたら……)

考えるだけで鼓動がおかしなくらい高鳴り、真っ直ぐ立っていられなくなる。

下腹部に感じる、痛いくらいの息苦しさ。股間はもうズボンを突き破りそうな勢いでいきり立ち、どうにもおさまりがつかなくなっていた。

その勢いは、先日、三人へ『エッチなマッサージ』をお願いしたときを上回っている。

「文也お兄ちゃん、苦しそう……」

譜面台で身体を支えたまま、肩越しに青年の様子を窺う花恋が呟く。

特に恥ずかしがって悲鳴を上げることなく、ズボンにできあがった高いテントを熱く潤んだ瞳で真っ直ぐ見つめ続けている。

それだけで敏感な亀頭を突かれているような錯覚に陥り、硬く勃起した肉槍がより鮮烈

な快感を求めて痙攣を繰り返す。

「きて、文もお兄ちゃん。私のこと好きっていう気持ち……オ、オチンチンで感じさせて欲しいよ。上手に誘惑できたご褒美……いっぱいして」

「ああ……最高の誘惑だったよ。可愛くて、エッチで……そんな花恋も好きだ！」

意識が吹き飛びそうな昂りを嘔み締めつつ、文也は自分の方へ突き出されている尻房へ自らの腰を叩きつける。

クチュツ……ヌプルツ。

「んあつ、ああ!!」

「きゃふうつ、はあ、ひゃんんんっ！」

その直後、二人の甘く上擦る声がほぼ同時に飛び出した。

硬い肉竿テントの先がちようど震える穴口へ密着し、そこから滲み出てくる熱液が急速に染み込んでくる。そのじつとりと蕩けそうな熱感と、小刻みに蠢く肉皺の刺激。甘ったるい痺れが腰まで響いてきて、文也は情けなく息を切らすしかなかった。

「私、もう切ないよお……お願い、文もお兄ちゃんの初めて……私の初めてと交換して」

ヒップを落ち着きなく上下へ振り、綻ぶ肉裂の端から端までを屹立へ擦りつけながらねだってくる花恋。ズボンに塗り込まれる愛液の染みが急速に広がり、それに伴って高まってくる熱感で今にもペニスが蕩けてしまいそう。

(……いいよな。俺と花恋はちゃんと告白して、恋人になったんだから)

催眠術を使用しているが、今、お互いに告げた気持ちは間違いなく本当の気持ちだ。だから——こうして求め合っても、悪いことはない。

言い訳がましく心の中で叫びながら、文也は自分でもどうにもならないくらい暴走した気持ちに背を押されるまま、慌ててズボンのファスナーを下ろす。

「花恋、い、挿れるぞ。初めて……もらうからな！」

「うん、きて。文也お兄ちゃんのオチンチンで、お腹の奥持ち上げてっ!!」

恥ずかしそうに声を上擦らせながらねだってくる幼馴染みの背を見下ろしながら、文也は取り出した屹立の先端を物欲しげに震える穴口へ押しつける。

グチュツと艶めかしい水音が鳴り響き、押し広げられた粘膜がふくれあがった亀頭を舐めしやぶるように絡みついてきた。

わずかにざらつく肉皺が表面を熱心に擦り、少しずつ溶かされていくよう。

先日味わった手や乳房での奉仕とはまた違う、より熱くうっとりとする快感だ。

「はあ、んっ、は、早く……焦らされると、少し怖いから……」

「あ、ああ！ 待ってる、今、一気に……」

荒く息を切らし、ツーサイドアップにまとめた明るい色の髪を振り乱しながらねだってくる幼馴染みに答えるなり、文也はより熱く蕩けそうな悦びを求めて腰を突き出す。

グチュウ、ヌリユウウツ、ズプププウツ、ヌツプウウウツ！

「はひいつ、んくつ、はあ、くる……ふ、文也お兄ちゃんが私の中に入ってくる。すごつ……中、広げられて……あはあつ、はあ、んくつ、あああああ！」

歓喜に跳ね上がる声と共に、濡れた肉壁をこじ開けるくぐもつた水音が漏れ響く。

想像していたよりもはるかに狭苦しい、限界までふくれあがった幹胴がひと回り以上小さく圧縮されてしまいそうなくらい窮屈な腔道。

それでも動きを止めず力任せに腰を押し出し、途中、特に強い抵抗を感じる場所を突き破って根元までしつかりと埋めていった。

「んくつ、はふああああ！ おおつ、奥……届いてるよおつ。お腹の奥……グイッて、文也お兄ちゃんに押ししてもらえてる、オチンチンで持ち上げられてるっ」

花恋は背筋を仰げ反らせ、ちょうど前にあるマイク目掛けて一際高い叫びを上げる。

同時に肉道全体が激しく波打ちながら狭まり、いよいよどれだけ力を入れても肉槍が動かせなくなってしまうくらい拘束されてしまった。

「花恋……力入れすぎ……」

声が自然と上擦ってしまうほどの強烈な息苦しさを堪えつつ、キュッと窄んで竿の根元を食い千切らんばかりに締めつけてきている腔口を覗き込む。

太い幹胴に貫かれ、今にも端が裂けてしまいそうなくらい丸く広がった穴口からは、わ



ずかに泡立った蜜と共に赤い液体が溢れ出てきている。

ずっと互いに想い合ってきた幼馴染みの純潔を奪った、何よりの証。胸の奥に残っているわずかな葛藤も綺麗さっぱり吹き飛び、目頭が熱くなるほどの歓喜で心が満たされた。

「ふああっ……嬉しいよ。私……文もお兄ちゃんのお嫁さんになれたあ……」

「ああ。俺も……ンッ、だけど大丈夫か？ 血、結構出てるけど……」

嬉しそうに声を震わせている花恋だったが、涙で潤んだ深い藍色の瞳は苦しそうに細められ、息も明らかに荒くなってきていた。

破瓜の痛みが尋常ではないということが、その表情からはつきり伝わってくる。

（動きたい……けど、今は無理そうだな）

込み上げてくる欲情を噛み殺し、ひとまずはそのまま様子を窺う。

呻き声混じりの吐息が桜色の唇から漏れる度、膣壺の締めつけも強くなる。

手で力任せに握られるよりも窮屈で、ジンと強い痺れが竿の芯を駆け抜けるほど。

それはそれで気持ちいいが、そのせいでより甘美な刺激を味わいたいという気持ちがふくらんでくるのを止められない。

「んふっ、はあ、ふ、文もお兄ちゃん、動いていいよ。いっぱい私のお腹を突いて、一緒に気持ちよく……なって……はひいつ、んくっ、はあ、はうっ」

「無理をするな。花恋に痛い思いをさせて、気持ちよくなれるわけないだろう」



「でも……んふっ、はあ……あの、そ、それじゃあ……催眠術でどうにかならないかな。この間の収録のとき、感覚をすり替える催眠術って……あつたでしょ？」

気づかう青年へ、また苦しげに顔を歪めたままの少女が提案する。

先日行われた番組収録の際、花恋は確かにそんな催眠術をかけられていた。

あのときは味覚を変えるところで、しょっぱいものを甘く感じるようになるという暗示をかけられ、塩をたっぷり入れたカフェオレを美味しそうに飲んでその効果をスタジオ中の人間に知らしめた。

「催眠術……か」

その催眠術を応用し、苦痛を消す……いや、痛みを別の感覚にすり替えるというのは確かにいいアイデアだ。

どうせならば――。

「よし、いいか、花恋。俺が『LOVE LOVE ポーズ』をしたら、お前は痛みを気持ちいいと感じるようになる。……いくぞ」

こちらを振り返り見る幼馴染みへそう宣言し、さっきと同じように男の自分がやるには少し恥ずかしい決めポーズをして見せる。

それをじっと見ていた花恋は、一瞬だけ瞳から光が消えたうつろな表情になった。

今ので、恐らくは新たな催眠効果が追加されたはずだ。

調子に乗りすぎだと自覚しながらも止められず、震える少女の腰から離れた両手でいつもの決めポーズを作り——また新しい催眠術をかけた。

「ひとつになって、俺のことがどれだけ好きかを伝えてくれ。やり方は教えるから」

「ほ、本当にするの？ あのと……」

「大丈夫。瑠香の身体は、もう準備できているみたいだよ」

撮影用に敷かれているシートに身を横たえた文也は、自らの上で不安そうに顔を強張らせている少女に優しく声をかけながら、軽く腰を突き出す。

ヌチュツ……チュプリユツ。

手で根元を掴んで角度を垂直に調整した屹立の先が、横へずらされたスク水の股布から覗く肉唇に優しく接触した。

小さな淫音が鳴り響き、熱粘液に塗れた媚肉が表面に吸いついてくる。

「きゃふっ?! あふっ、はあ、わ、わっくん……ダメ……恥ずかしい。そんなところにすりつけるの……んふっ、あああつ!! 当たってる、わっくんの……はううっ」

「俺の何がどこに当たってるって？ はつきり言ってくれないとわからないよ」

「い、言えない!! そんなの……恥ずかしすぎておかしくなっちゃうよ!」

意地悪に問いかけた青年へ、腰上に跨がる瑠香は長いポニーテールをブンブンと大きく

横に振って返す。折り曲げられた膝が小刻みに震え、今にもその可愛らしく引き締まった尻房が落ちてしまいそうなのを必死に堪え続けていた。

(本当に催眠術って凄いよな……)

いつも気圧されるくらい積極的に迫ってくる少女と、同一人物とは思えない姿だ。

硬く睨られた瞳からは涙の雫が溢れ、唇はキュッと硬く噛み締められている。

初体験への羞恥と恐怖がありありと見えるその姿は、背中がゾクゾクするくらいの甘美な興奮を掻き立ててくれる。落ち着きなく開閉を繰り返す膣口へすぐ突き入れてしまった互いの想いを分かち合う大切な瞬間を、自分ひとりの判断で味わうわけにはいかない。

「照れてる留香……凄く可愛いよ。だから……いいかな？」

問いかげながらまた軽く腰を突き上げ、穴口に先っぽを少しだけ押し込む。

それだけで吸い上げられるような心地よさが尿道に走り、思わず息を呑んでしまう。

「んふっ、ああ、わ、わっくんのが、あたしの……当たって……はううっ」

素の性格は誰よりも照れ屋な旧友を真似るように、視線を泳がせてうろたえる留香。

だが、亀頭で押し広げられた入口はわずかに緩み、あてがわれたものを早く奥まで飲み込みたいと言わんばかりに肉壁が波打っていた。

「留香、口で言いづらいなら行動で告白してくれ。このまま腰を落として」

「あうっ、う、うん。恥ずかしいけど、でも、あ、あたしだつて……花恋やミー姉と気持ち  
ちは同じだもん。わっくんのこと、ずっと……だから、だからあつ」

可愛らしい唇を噛み締めた刹那、スク水姿のアイドルが勢いよく腰を落としてきた。

ヌップウツ、ズブズブウツ、ヌチュウウツ！

狭苦しい肉壺を、焼けるように熱く勃起した剛直が挿し貫く。ここ最近、すっかり聞き  
慣れてしまった淫音に耳を傾けている間に、紺色の布地に包み込まれた小尻が腰骨の辺り  
へ衝突してゴムボールのような勢いで弾む。

「ひぎいつ、くううっ、はあ、入ってるよ。わっくんがあたしの中……はあはあっ、あた  
し……本当にわっくんと繋がってる……ひとつになれたあ」

うっすらと瞳を開けた瑠香が、嗚咽混じりの声で呟く。

声に合わせて小刻みに動く腠粘膜が、奥まで入り込んだ肉竿へ絡みついてきた。

今にもはち切れそうなくらい張りつめた竿肌が舐めくすぐられ、根元が穴口に強く締め  
つけられる。言葉で伝えられない分、想いを必死に訴えようとしている情熱的な動きに、  
肉竿の芯で甘い疼きが何度も弾けて脈動が激しさを増していく。

「うぐっ、はあ、す、凄いな、これ……チンポが思いきり吸われて……おおっ」

「だって、う、嬉しい。あたしもやっつとわっくんのものになれたあ……」

目が眩みそうな快感を噛み締めながら呻く青年を見下ろし、涙声で呟く瑠香。

その間にもまるで意識を持つているかのように膣壁が蠢き、絡みついてくる膣肉にしゃぶられた剛直が、蕩けそうな甘い快感に支配されていた。

催眠術で精神的にはシャイになっても、肉体は本来の積極さを失っていないようだ。

「あの、し、していいよ。……男の人は、動かないと気持ちよくならないでしょ」

可愛らしい少女の容姿とはかけ離れた牝の本能を感じさせる肉穴の動きに浸っていた文也は、そんな震え声に促されて軽く顔を上げる。

「大丈夫なのか？ その……痛みは」

結合部を覗き込むと、充血してしまいうくらい広げられた穴口の隙間から赤い液体が溢れてきているのが見えた。それは間違いなく、彼女の初めてを貫いた証だ。

プロデュースするアイドル達全員の純潔を、ついにすべて奪ってしまった。そのことに喜びと罪悪感の入り混じった複雑な思いが込み上げてくる。

だが、今は自分のことよりもこのポニーテールの少女の身体が心配だ。

「だ、大丈夫……んふっ、はあはあっ」

「辛いなら無理をしなくてもいいぞ。何なら、催眠術で……」

花恋やミレーユとしたときと同様、痛みを消した方がいいだろう。そう思っていたものポーズを両手で作ろうとしたが、留香はそれを制するように首を横に振った。

「我慢できないほど辛くはないし……ちゃんと覚えておきたい。……わっくんのものにし

てもらえた、記念だもん。凄く嬉しい……幸せな痛さだよ、これ」

涙で潤んだ瞳を細め、幸せそうに頬を緩める。無理に強がっているのではなく本心からそう思ってくれているのだと伝わってくる優しい微笑みを見ていると、こちらも目頭が熱くなる深い喜びが込み上げてきた。

「はあ、う、動けばいいんだよね。あたし頑張る……口では恥ずかしくて言えないから、その分いっぱい感じてもらいたい。わっくんのことを想う気持ち……はあはあっ」

苦しげに息を荒くしながらも、瑠香は言葉どおりにぎこちなく腰を動かし始めた。

ヌチュツ……グチュリイツ、ヌプリユウツ。

長いポニーテールとそこをまとめている桃色リボンを揺らしながら、小ぶりな尻房を熱心に上下へ振る。幾重にも折り重なって張りついてきている粘膜肉を振り払いながら、肉槍が熱壺の中を往復していく。

「うぐうっ、はあはあ……き、気持ちいいぞ、瑠香」

「う、うん。んふっ、中、熱いよお……い、痛いって言うよりもジンジンして……凄く感じる。わっくんが、あたしの中に入ってきてるって……はひいつ、はああああっ」

額に大粒の汗を浮かべ、余裕なく声を詰まらせながらも腰を振り続ける瑠香。

剛直の出っ張りが壁面に引っかかって動きが遮られる度、大げさなくらい背筋を痙攣させて両手の拳を硬く握り固める。膣口もキュツと狂おしく窄み、その度にゴボゴボと音を

立てて破瓜の鮮血で色づいた蜜液が溢れてきた。

竿肌全体がねつとりとコーティングされ、湯船に浸かっているような心地よさだ。

「凄いい濡れ方だな。もう床まで垂れちゃいそうだよ、瑠香のエッチな汁……」

「はうっ、い、言わないでよ、わっくん。ンンウツ、い、意地悪う」

「可愛いんだよ。そうやって恥ずかしがる瑠香が」

きつい締めつけに扱かれるペニスの快感に浸りながら、言葉のひとつひとつに反応して身震いする少女をじっと見つめる。長年、積極的な態度で自分を翻弄し続けていた相手にこうして仕返しをするのは、想像していた以上の興奮を味わえた。

猫のように可愛らしい瞳をキュッと睨り、肩をビクビク震わせる。肢体を包むスク水が醸し出すあどけない雰囲気ของせいもあり、思わず抱き締めたいくらいの可愛らしさだ。

「ひぐうっ、くんん！ はあ、わっくんの……な、中でふくらんでるよ。お腹の中、いっぱいになって……はあ、くふあっ、い、息できなくなりそお……はんんうっ」

「何がふくらんでるんだ？ そろそろちゃんと言って欲しいな」

照れてはつきりと単語を口にしなない少女を責めるように、軽く腰を突き出す。

ちようど座り込んでくるタイミングだったこともあって屹立が今までも深いくところまで沈み、先端が行き止まりの壁に肉傘の辺りまで食い込んでしまった。

「はあっ、ひぎいっ、くううう!! いいっ、お、奥……子宮に……子宮までわっくんが届

いてるうっ。はあ、んんうっ！　オ、オオ……オチンチン……オチンチンがあっ」

小さな肉室を押し上げられる快感に背筋を仰け反らせた瑠香が、何度も詰まりながらついに淫らな言葉を叫んだ。その強烈な羞恥を訴えるように膣壁が震える。

さらに胸元の形よい隆起の頂点が、紺色の布地にツンと浮かび上がってきた。

「胸が苦しそうだね……ちよつと脱いじゃおうか」

「ふえ……ぬ、脱ぐ？　そんなつ、ダメだよ！　見えちゃう……」

「ああ、見たいんだよ。……瑠香の可愛いおっぱいが」

口を酸欠の金魚みたいにパクパクさせて慌てる少女を見つめながら、文也は軽く上体を起こして彼女の肢体を包むスク水の肩口へ手をかけた。そのまま抵抗する余裕も与えずに肩紐から両腕を外し、みぞおちの辺りまで布地をずり下ろす。

プルンツと瑞々しく揺れながら、手の平に少し余るくらいの美乳が飛び出した。

最初に催眠術をかけた日、奉仕してもらったとき以来に見る生乳。汗ばんで甘酸っぱい匂いを漂わせるそこに、一瞬息をするのも忘れて見入ってしまう。

「ひゃっ、ああ、み、見ないで！　恥ずかしい……ダメだつてばあっ!!」

やつと我に返ったポニーテールの少女が、両腕でそこを抱えるように隠す。

半球型のふくらみが不規則な楕円形に潰れてしまうくらい力が入っているのは、それだけ恥ずかしくて我慢できなかったということだろう。



そうやって彼女が愛らしい恥じらいを見せるほど、文也の欲情は熱く燃え上がる。

「留香も気持ちも身体も……全部、隠さず見せて欲しいな。俺が『LOVE LOVE ポーズ』をしたら、留香は腕に力が入らなくなる。……ほら」

悪戯っぽい微笑みを投げかけながら、戸惑うポニーテールの少女へ催眠術のトリガーとなるお決まりのポーズを作ってみせた。

「きゃううっ!? ど、どうして……や、み、見える、見えちゃう!」

その直後、まるで糸が切れたように留香の両腕がだらりと垂れ下がり、抱え隠されていた双丘があらわになった。

「ううっ、腕、動かない……い、意地悪しないで、わっくん!」

甲高い声で抗議しながら、視線から逃れようと背筋をくねらせる。それに合わせて乳房が惱ましく誘うように揺れ、ますますじつと見入ってしまう。

「どうしてそんなに恥ずかしがるんだ? 凄く魅力的なおっぱいなのに」

「だって……ち、小さいから。花恋やミー姉と比べると……自信ないもん」

首を傾げて問いかけた文也へ、留香は拗ねたように軽く唇を尖らせながら答える。

「そんなことないって! 別に気にしなくてもいいのに」

以前から度々、並外れた巨乳の二人と比べて小さいと冗談っぽく言うことはあった。本気でそれを引け目に感じていたと知り、思わず目を丸くしてしまう。

「男の人は、大きい方が好きなんですよ？ わっくんだったって……」

「そりゃ大きいのは好きだけど、瑠香だって十分大きいし、魅力的だよ」

自信なさげにうつむく少女へ囁きかけ、すぐさま双丘へ手を伸ばしていく。

吐息に合わせて弾むふくらみを下から抱えるように掴み、さらに指先でぷつくりと可愛らしくふくらんだ肉粒を摘んでやった。

「さ、触っちゃダメ……はぁ、恥ずかしいっ、くふっ、あんんっ！」

火照る白肌へ指を食い込ませると、抗議してきた声が甘く上擦る。

背筋が落ち着きなく震え、屹立を包む粘膜肉も気持ちよさそうに痙攣した。

「感度もいいみたいだね、瑠香のおっぱい。……ますます好きになりそうだし」

期待以上の好反応に氣をよくした青年は、持ち上げた美乳を丁寧にこね回していく。

グニグニと強めの弾力を楽しみながら指を沈め、大きさの割にやや小さめの乳首粒を捻り潰す。激しい愛撫に合わせて、そのお返しとばかりに膣内がそこを出入りする屹立を力いっぱい締めつけてきた。思わず息が止まってしまいそんな強い快感を嘔み締めつつ、負けじと執拗に肉粒を責め続ける。

「くふっ、はぁ、ひふあっ！ おっぱい、そ、そんなにいじめないでよお……あたし、もう恥ずかしすぎて、おかしくなる……くふっ、は、ひいっ、はんんんうっ!!」

必死に訴えつつ、胸元を何とか隠したいと言わんばかりに自由が利かなくなっている手

を動かそうとしているのが、わずかに震える肩を見てみるとよくわかった。

そのいじらしい姿にますます気持ちが昂り、もう我慢できなくなってしまう。

「止められないよ。プルプルして揉み心地も最高で……こうして触っていたら、ますます  
瑠香のおっぱいが好きになってきた。いや、おっぱいだけじゃない……この熱くてトロト  
ロのおマ○コも、可愛らしいお尻も……全部、素敵だ」

「ううっ、嬉しいけど、恥ずかしい……はぁ、恥ずかしくて……らめえっ」

素直な気持ちを訴える文也から視線を逸らした瑠香は、そんな悲鳴のような声に合わせて  
て今までもよりも激しく肢体を動かし始めた。

グチュウ、ズプリユウツ、ヌチュツ、ズップウツ、ズブブウツ!!

「くふっ、はぁっ、ははっ……凄く積極的になつたね、瑠香」

淫らかな水音に合わせ、剛直が波打つ肉道を素早く往復する。

柔らかな膣肉が全体をしゃぶるように絡みつき、入口が痛いくらいきつく締めつけられ  
てしまう。入口のところ横にずらされた紺色の股布が竿肌を強く擦り、それがまたひと  
味違う刺激を与えてくれる。一往復ごとに少しづつ表皮が蕩けていくような極上の快感で  
勃起の勢いが増し、そのせいでより抽送が窮屈になってきた。

当然のように摩擦が激しくなり、じっとしていられず腰を突き上げてしまう。

「くひいっ、はぁ、ひふぁっ、あああ！ わ、わっくんのが奥にいつぱい届くよおっ」

「ああ、凄くいやらしくなってるよ。……ほら、自分で見てみなよ」

荒く息を切らして悶える瑠香を促しつつ、腰に密着している張りのある尻房を跳ね飛ばすような勢いで腰使いを加速させていく。

パンツと尻肌を打つ乾いた音が響く度、乳房とポニーテールが悩ましく揺れる。肌からは汗が、結合部からは淫粘液の飛沫が散り、甘美な香りがスタジオ全体に広がっていく。

「くふっ、はあ、んふう、はあ、こんな……はあ、恥ずかしい……あたし、わっくんといきなり激しくしちゃってる……いっばい、奥までじゅぼじゅぼされてえ……おっばいも弄られて……たくさん愛してもらえてる、あふっ、んん!!」

瑠香が恥ずかしそうにチラチラと胸元や下腹部を覗く度に、出入りする屹立を搾るような勢いで肉壺が収縮する。壁面で生き物のように蠢く皺が竿肌に食い込み、蕩けて快感神経が剥き出しになっているそこを執拗にくすぐられてしまう。

鼓動に合わせて脳天まで強く響いてくる射精衝動で、今にも意識が飛びそうだ。

「くっ、で、出そうだ。瑠香、もう……はあはあっ」

「う、うん。あたしももう無理……して、わっくん。花恋やミー姉と同じように、最後までちゃんと……あたしもわっくんのお嫁さんに……『三番目のお嫁さん』になるう!」

瑠香は大きく背筋を仰げ反らせ、唇の端からだらしなく涎を垂らして喘ぎ悶える。

中に出してしまっているのか、それに他のメンバー達が口にした台詞を知っているのかの

ような『三番目のお嫁さん』宣言が引つかかるが、もうそれを追求する余裕はない。

普段ではありえないくらい羞恥に悶える少女が、もつともつと可愛らしく照れる姿が見たい。その衝動を堪えきれなくなってきた。

「留香、それじゃあ……最後にちゃんと行って。オマ○コの中でいっばいチンポをビクビクさせて……子宮にいっばい種付けして……赤ちゃん、孕ませて欲しいってさ」

奥まで突き入れたところで腰を上下から前後の動きに切り替え、悩ましく締め続ける肉壺の感触を楽しみながら先走り汁に塗れた鈴口を行き止まりに擦りつけてやる。

掴んだ双乳も大きく円を描くように揉み潰し、悶える少女を追い込んでいく。

「はひいっ、はあ、そんな、言うなんて……考えただけで恥ずかしくて、頭がポーツとなっちゃんう……あたし、ぜつたいにおかしくなるうっ、んふっ、はあんっ」

「おかしくなった留香を見たいんだ。だから……ね？」

優しく語りかけながら、ダメ押しとばかりに指の間で硬く尖った桜色の乳首を挟む。

コリコリとそこを潰すような強さで圧迫すると、留香の緩んだ唇の端から透明の糸を引きながら唾液が垂れ、それが紺色のスク水に包まれたお腹の辺りまで落ちてきた刹那。

「んふっ、はあ、い、言う……頑張つて……あはあっ、はあ、欲しいよおっ、あ、あたしもオマ○コの中で……オチンチン、いっばいビクビクさせてもらいたい！ わっくんの赤ちゃん欲しい……た、種付けして欲しいよっ、きて……射精、きてええっ!!」

留香が意識朦朧としながら喘ぎ叫んだ瞬間、膣内が肉槍を力任せに掴むような強さで収縮した。それに呼応し、頭の中で火花が散るような鮮烈な快感が背筋を駆け上ってくる。

「だ、出すよ、留香！ 俺の精液、全部子宮で飲んでくれ!! くうっ」

最後の力を振り絞って叫び、痺れる腰を必死に突き出す。

隙間なく密着する肉壁を抉り擦り、先端が子宮口に埋まった——直後。

ドップリユウウツ、ビュルウ、ビュブブブウツ、ドップウウウ!

「あふうっ、ひいひいっ!! わつくんのオチンチン、中で震えて……くりゆうっ、熱いお汁がお腹にきてるうっ、んふっ、イク……くんうっ、あはあああっ♪」

鈴口が開きつばなしになり、そこから噴き出た白濁が留香の肉室へ流れ込んでいく。

受け止めるポニーテールの少女は、その勢いで吹き飛ばされそうになっているかのように全身を弾ませながら恍惚と甘ったるい叫びを上げていた。

大きく背筋を仰げ反らせ、天井を見るように上を向く顔は卑猥に蕩け、唇からわずかに飛び出す舌が甘美な昂りを訴えるように悩ましく揺れている。

その間にも膣肉は幹胴を搾るように収縮を繰り返し、文也はそんな無言の求めに応えて長々と吐精を続けていった。

「はあ、はふうっ、ほ、本当にお腹……いっぱいに出てるう……」

「ああ。……もう溢れてきちゃってるよ。ほら、見てみなよ」



「おっ、俺も出る……イクッ、ううっ、おおお!」

ビュルルルウツ、ドップウツ、ビュブルツ、ビュビュツ!!

雄々しく震える肉槍の先端から、独特の臭気を漂わせる白濁が進る。

「あはあ、出た、精液……んうっ、お兄ちゃんの投票汁、私のお顔にかかっているう」

「素敵……んぐうっ、はあ、私のお顔にかけて! ドロドロに染めてくださいませ」

「あはあ、あたしもみんなも真っ白お、凄いい、精液投票、大接戦になっちゃってる♪」

高々とまるで噴火のような勢いで放たれるそれを、下腹部を取り囲んでいたアイドル達が見ているだけで達したかのような恍惚の表情で見守っていた。

飛び散る熱液はうっとりと赤く染まった少女達の顔や胸元、背中やお腹やふとももと、身体中余すところなく白く染め上げていく。

「はふうっ、残りは私がもらうね。だって、私のオマ○コで興奮して出た精液だもん」

一瞬、ねつとりと肌に張りつく熱液の感触に酔いしれていた花恋が、ハッと我に返ったように竿の根元を引っ張って放出を続ける鈴口を自らの方へ向けようとする。

「違いますわ! 私の舌が気持ちよくてこんなにたくさん出ているのですよね?」

「ううん、あたしがいっぱいタママタマを舐めてあげたからだよね、わっくん?」

それに負けじと他の二人も花恋の手に重ねるようにして竿を握り、少しでも多くの精液が自らの肢体へかかるように奪い合いを始めた。



いきり立つ剛直を休みなく振り回され、強く握られる。

「お、おい、イッたばかりで敏感だからあんまり乱暴に扱わないで……くうっ」

その強い刺激のせいで射精はなかなか鎮まることなく、延々と続く。

腰が震えるくすぐったさを耐えかねて訴えるが、『票』となる愛しい青年の精液を集めることに夢中のアイドル達は聞く耳を持たず、屹立を握る手の力を緩めようとしなない。

それどころか――。

「もう、そんなことするなら……票横取りしちゃうよ。花恋のほっぺについてる、うんと濃いお汁……ちゅうっ、はあ、あは……れるおっ」

「ひやあああつ!? あうっ、も、もう……ダメ、文也お兄ちゃんが私に投票してくれた精液、横取りはダメなおっ! んうっ、わ、私だつて……ちゅうっ、はあ、れる……」

「きゃんうっ! どうして瑠香ではなくて私を舐めるの!? 首筋はダメ……あふうっ、私も独り占めしたい気持ちを我慢していたのに……許しませんわ。ちゅばっ、ちゅうっ」

甘い嬌声を漏らしながら、それぞれの肌を染める白濁を舌で舐め奪い始めた。

瑠香が花恋の頬を舐め、花恋がそれから逃れるように顔を背けつつミレーユの首筋にチロチロと舌を這わせる。そのくすぐったさに背筋を仰げ反らせたブロンドの少女は、お返しとばかりにポニーテールの少女の耳たぶを飛び散った精液ごとしゃぶり出す。

「みんな……エロすぎだぞ……」

じゃれ合う子猫の姉妹みたいに、夢中でお互いを舐め続けるアイドル達。

ドロドロの精液で真っ白に染まっていた顔が少しずつ清められていく姿は、思わず息を呑んでしまうほどの艶めかしさだった。

射精の余韻でけだるくなっていた下腹部がまた火照りだし、鼓動も加速していく。

「んふっ、れる……あはっ、見て見て！　喧嘩しなくても……まだまだわっくんのオチンチンからたくさん出そうだよ」

嬉しそうに声を弾ませる瑠香が見つめる先——アイドル達の唾液と射精の残滓に塗れた肉槍は、今まで以上の勢いでふくれあがり、物欲しげな痙攣を繰り返していた。

その昂りに気付いたミレーユと花恋もまた、視線を交わして小さく微笑む。

「あら……ふふっ、まだまだ私達に『投票』してくださるのね、プロデューサー」

「それなら……今度は誰に出してくれたか、ちゃんとわかるやり方がいいかな」

何やら目配せで相談していたアイドル達は、戸惑う青年を横目に立ち上がった。

すっかり乱れてしまった衣装を整えることもなく、向かって左から瑠香、花恋、ミレーユといういつもの順番で並び、文也のすぐ傍らに横たわった。

「やっぱり投票は、数えやすいところにしてもらえないと。ふふっ、誰の子宮が一番精液でふくらませてもらえたかで、決着つけようね」

「了解ですわ。ふふっ……トロトロオマ○コで、この前よりもたっぷり精液を搾り取って

差し上げます。さあ……早くチンポで投票してくださいませ」

「あたしのきつゝいオマ○コ、また入りたいでしょう？ いっぱい投票してくれるなら、オチンチンがおかしくなっちゃうくらい気持ちよくしてあげるよ。早くうっ」

中央でほっそりと長い美脚をM字に広げ、さっきまで舌で丁寧な舐め解されていた秘所を晒してねだるツーサイドアップの幼馴染み。

左右に横臥する二人は、それぞれ上側になった脚を大きく掲げていた。

ミレーユは自らの黒いレースショーツの股布を横へずらし、瑠香はスパッツの裂け目を広げて、それぞれの秘所を青年の視界へ惜しみなく晒す。

綻ぶ縦筋から覗く媚粘膜が、照明を受けてキラキラと輝いている。まだ触れられていない彼女達のそこもまた、膺壺から溢れる愛蜜に塗れている何よりの証だ。

催眠術の力とはいえ、大勢のファンから愛されている清楚なアイドル達が自ら卑猥な姿を見せて求めてくれている。

胸が歓喜に打ち震える光景に心奪われた文也は、飛び上がるように身体を起こす。

「誰に投票するか、困っちゃうな……みんなに入りたいよ」

とてもひとりを選べそうにない、贅沢な悩み。透明の蜜を溢れさせて自分を誘う三人の蜜壺を順々に見つめながら、まずは中央にいる幼馴染みの前に屈み込む。

「とりあえず……お嫁さんになってくれた順番に……いいかな」

「うん、きてえっ！ズボズボ穿<sup>ほじ</sup>つて、早く子宮いっばい精液投票してえっ!!!」  
感極まった艶声で求めてくる花恋に頷き返し、自らの唾液と溢れる愛液で端々まで濡れ解れている肉壺に剛直の先端を押しつけた。

すぐに折り重なる肉皺が蠢き、奥へ飲み込もうと亀頭へ絡みついてくる。表面が舐めくすぐられる心地よさに身を委ね、抗うことなくそのまま腰を力強く突き出した。

ヌプリユウツ、ズプウウウツ、ジュブブブブウツ!!

「んくっ、はあ、ひふああつ、あああ！きたあ、文也お兄ちゃんのオチンチン、オマ○  
コにいっばいくるっ……出して、すぐ出していいからあつ……はあ、んふううっ!!」

ツーサイドアップのアイドルは窄む肉壁を押し広げられる感覚に声を震わせながら、早速『票』となる白濁放出を求めて悶え喘ぐ。

初体験から今日まで機会がなく、これが結ばれてから二度目の挿入だ。

ほとんど初めてのとくと変わらぬ窮屈な締めつけ。竿肌隙間なく張りついた粘膜壁に表面が強く擦られ、脊髄まで響く甘美な快感に幹胴が悩ましく蠢動する。

「わかるかな……早く熱い投票して欲しくて、もう子宮口が開いちゃってるのお……」  
「ああ、ヒクヒク動いてる。それに濡れ方も凄い、いきなり奥まで入れるぞ!」

淫液に塗れた先端が子宮口に密着した瞬間、膣道がさらにひと回り窮屈になった。  
張り出す雁首が壁に食い込み、一瞬身動きが取れなくなる。思わず息が詰まりそうな締



めつけで下腹部全体が痺れ、意識が濡れ蠢く蜜裂のように蕩けてきた。

「そこっ、もつと……んくっ、いっばいズブズブして。文也お兄ちゃんの気持ち、オマ○  
コでもいっばい感じたいのっ！ もつとっ、もつと……くふっ、はんんう!!」

普段はシャイでおとなしいはずの幼馴染みが、ダメ押しとばかりに自ら腰を振って自らと繋がる青年を煽り始めた。

催眠術のせいだけではなく、彼への想いが胸いっばいにふくらんで我慢できなくなっているのだろう。可愛らしい桃尻を床上で滑らせ、大きく広げたふとももの付け根辺りを硬直する青年の腰骨へ必死に打ちつけてくる。

ズップツ、ヌチュウツ、ズブブウツ、ヌップウウウツ!!

「くっ、はあはあ、か、花恋！ 激しい……うぐっ、はあ、うううっ！」

窮屈すぎる腔内を剛直が壁面を削り広げるような強引きで往復し、幹胴はもちろん、下半身全体の感覚が吹き飛びそうな強い痺れを堪えることができない。呼吸も乱れて整えられず、もう真っ直ぐ身体を起こしていられないくらい頭がボーッとしてきた。

「だって、が、我慢できないよおっ……嬉しい……ちゃんと全部正直に話して、いっばい愛してもらえて……お嫁さんにしてもらえて、幸せえ！」

花恋は甘く掠れた声でその悦びを訴えつつ、夢中で求め続けてくる。

その激しい動きで胸元を隠すビキニブラ状の衣装が上乳の方まで捲れ、物欲しげに尖っ

た桜色の乳首粒があらわになつてしまふ。

身体の揺れに合わせて、押さえる物がなくなつた美巨乳が盛大に揺れる。

縦長から横長へとめまぐるしく形を変える瑞々しい動きが、腰使いに翻弄されて朦朧としていた青年の視線を引きつけた。

「やっぱり大きくて形も綺麗で……魅力的だよ、花恋のおっぱい」

熱い吐息で声を掠れさせながら、文也は早く挿んで欲しいと言わんばかりに揺れ続けている幼馴染みの双丘へ両手を伸ばす。もう氣遣つて力を加減する余裕などない。いきなりすべての指を柔らかな乳房へ深く埋め、パン生地を捏ねるように強く揉み潰した。

「くふっ、ふあんんっ！ あはあっ、いいっ、おっぱいもオマ○コも強くしてえっ」

「ああ、もう止められない……思いきり花恋を感じたいんだっ!!」

「うん、感じてっ！ お兄ちゃんの気持ちをいっぱい込めた精液、私の子宮にたくさん投票して欲しい……一位になるうっ、受精しながら文也お兄ちゃんの一位になるのっ!!」

少し呂律が回らなくなつてきたツーサイドアップの少女は、肌に浮かべた汗を振りまくような激しさで腰をくねらせる。

言葉と身体で求めてくる愛しい幼馴染みに応え、文也も心地よい弾力の乳房をしつかりと挿んだまま、奥の肉室まで屹立を届けようと激しい抽送を繰り返す。

ズップウツ、ジユブウツ、ヌプリユウ、ニユプツ！

「ひぎつ、くううう！ イツ……くんつ、あはあつ、私、もう……くりゆうつ、気持ちいいのきちやううつ!! きて、文もお兄ちゃんも一緒に……私の中あ……」

繰り返し背筋を仰け反らせる花恋が、藍色の瞳いっぱい涙を浮かべて悶える。

声が高く跳ね上がるのに合わせて肉壺全体が収縮し、剛直がしつかり捕らわれた。

その気になればいつでも限界を超え、込み上げてきているものが溢れ出しそう。

菌を食い縛ってそれに耐えていた文也が、思わず限界を訴えそうになった刹那。

「プロデューサー、誰に投票するかは……これも味わってからにしてくださいませ。私のここも、オチンポから白い票を搾り出したくて疼いていますの」

花恋の左手側に横臥していたプロンドの少女が、上気した頬に挑発的な笑みを浮かべて声をかけてきた。両手で既に露出している胸元のふくらみを抱えるように持ち上げ、それを縦や横に悩ましく揺らして誘いかけてくる。

「んふつ、はあ、ふふつ、私のおっぱい……乳マ○コも好きですわよね？ ここでたくさん扱げば、さつきよりも濃い精液を投票していただけるのかしら」

左右の乳房を交互に揺らしたり、中央へ思いきり寄せたり。ミレーユはその間に肉幹を挟んで奉仕することを連想させる動きで青年の欲情を煽る。

スイカのような爆乳が大胆に揺れる動きに、文也はそこにむしゃぶりたいという衝動をすぐ我慢できなくなってしまった。



「う、うん……花恋、続きは後で！」

少し寂しげな幼馴染みへ頭を下げ、放したくないとせがむように収縮する膺壺から力任せに屹立を引き抜いた。すぐさま身体を少しだけ右に移動し、プロンドのアイドルが高く掲げている左脚を肩に担ぐようにして身体を滑り込ませる。

「さあ、どうぞ召し上がれ♪ もうオマ○コともおっぱいも、プロデューサーの白いお汁を受け止める準備はできていますわ！ お好きに感じて出しまくってくださいませ」

「ああ、お言葉に甘えて……入れるよ！ 胸も……んっ、あああっ!!」

ズブウリュウツ、ズブズブウツ、ヌツプウツ!

荒く息を切らして求めてくるミレーユに応え、蜜を滴らせる肉壺にあてがった屹立を間髪容れず奥まで挿し入れていった。

同時に片手を彼女自身が揉み寄せていた双丘へ伸ばし、ふわふわの爆乳を握り潰さんばかりの強さで掴んだ。ズブズブとどこまでも指が沈んでいくような極上の柔らかさと温もりを堪能しつつ揉み捏ね、同時に腰も休みなく突きまくる。

「ひっくうっ、くふっ、はあ、あはあっ! す、凄いですわ、プロデューサー……情熱的なセックス……身体中、いっぱい感じますうっ、はひっ、あんんっ!!」

「お、俺も……やっぱりミレーユのおっぱいって気持ちいい。柔らかくて、それでいて思いきり握ると優しく押し返してきて……ずっとこうして揉んでいたくなっちゃうよ」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※主人公の活躍は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!